

大学英語教育における評価の 「無力化」と「実用化」に関する一考察

——論文“A Nice Derangement of Epitaphs”を問題提起として——

山中 司

要 旨

英語教育評価論は、昨今の項目応答理論の寄与などにより目覚ましい発展を遂げてきた。妥当性、信頼性を担保し、個々人が持つ安定した英語能力の特質を抽出することを目論むならば、それらの目標に対しては限りなく達成に近づきつつあるといえよう。しかしながら、これらの評価論パラダイムの根底には、いわゆる「英語力」というものの存在が前提とされ、それらを評価・測定できるという想定に基づいている。本当に英語力は存在し、そして評価できるのか、評価論におけるこれら根本問題の検討はこれまで十分なされてきたとはいえない。

本研究は、D. Davidson が言語哲学における論文“A Nice Derangement of Epitaphs”にて提起した言語とコミュニケーションにおける根本問題を大学英語教育の文脈で検討し、理論的検討を経て既存の英語教育評価論の限界を示すことを試みる。そして新たな認識論に基づいた評価パラダイムとして「評価論プラグマティズム」を提唱し、その理論フレームワークを素描する。

キーワード：大学英語教育，評価論，言語哲学，コミュニケーション，プラグマティズム

1 はじめに

本論文は、D. Davidson (1986) が論文“A Nice Derangement of Epitaphs” (以下 NDE と表記) にて提起した言語とコミュニケーションにおける根本的哲学問題を、大学英語教育の文脈で検討し、既存の英語教育評価論の理論的限界を示す。そして新たな認識論に基づいた評価パラダイムとして「評価論プラグマティズム」を提唱し、そのあり方を模索する。

英語教育評価論は、コンピュータ導入による項目応答理論¹⁾の発達等も寄与することで、特に 20 世紀後半以降目覚ましい発展を遂げてきた。妥当性、信頼性を担保し、個々人が持つ安定した英語能力の特質を抽出することを目指し、この目標については限りなく達成に近づきつつあるといえよう。しかしながら、これらの評価論パラダイムの根本には、いわゆる「英語力」というものの存在が大前提とされており、そしてそれを評価・測定できるという想定に基づいている。本当に英語力は存在し、そしてそれらを評価できるのか、評価論におけるこれら根本問題はこれまで十分に検討されてきたとはいえない。

また国全体としての大学英語教育が停滞する中、コミュニケーション重視の英語教育を目指

して改革に挑む教員は少なくない。英語を使ったコミュニケーション活動を授業内で積極的に取り入れ、それを評価しておこうとする政策的潮流も生まれつつあり、評価の軸足も単なる「言語的能力」から「(言語) コミュニケーション能力」へとシフトしていることについて異論を唱える者は多くないだろう。こうした中、コミュニケーションを重視した大学英語教育の成功モデルの一つとして、鈴木佑治(1994, 1997, 2000, 2003, 2012)が開発・考案した「プロジェクト発信型英語プログラム (Project-based English Program: PEP)」があり、自身も現在立命館大学生命科学部にて当教授法に教員として従事している。同プログラムはこれまで慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス (SFC)、立命館大学生命科学部、薬学部、スポーツ健康科学部にて高い成果をあげてきたが、開発者である鈴木が指摘する通り、英語の言語的能力も含めた広義のコミュニケーション能力を適切に評価するモデル開発は急務であり²⁾、未だ満足のいく発信能力の評価モデルや、コミュニケーション能力の評価モデルは確立されていない。これまで多くの研究者がそれらの開発に取り組み、筆者自身もこの課題に長い間取り組んできた³⁾。しかしながら、たとえ試案を提示することはできても、妥当性の高い包括モデルの開発には至っておらず、結果的に現行の実践知の中から編み出した項目、尺度を組み合わせて評価を実施しているのが実情である。無論一部の項目に客観性は担保されているものの、評価者の主観や、恣意的な項目設定が、コミュニケーションの判断や評価に一定の影響をもたらしていることは否めないのではないだろうか⁴⁾。

しかし興味深いことに、大学英語教育の現場に立つ一介の教員として、それにも関わらず評価が妥当なところに落ちている実感がある。この点を考察する時、NDEの言語とコミュニケーションについての特異な論考を思い起こさずにはいられない。「言い間違い (malapropism)」を含むにも関わらずコミュニケーションが成立することを説く Davidson の指摘は、もはや言語の「字義の意味 (literal meaning)」の正確な理解の如何を議論する、いわゆる外国語教育の範疇を超えている。Quine と共有する「根源的解釈 (radical interpretation)」(Davidson 1984) の議論も加味すると、NDE の問題意識は、広く言語をその一部に含むコミュニケーション論の観点から議論されるべきなのである。NDE が指摘する「この世でのうまい振る舞い方 (knowing our way around in the world generally)」とは一体何を表わすのか。そして現行の評価モデルは、直接的にせよ間接的にせよ、この「振る舞い方」を評価しているが故に、一定の妥当性と相関を示しているのではないか。こうした内容につき本論文は真正面から挑み、プラグマティズムの論考を重ね合わせることで一定の回答を試みることにする。

2 英語教育における既存の評価パラダイムの限界について : NDE の思索から

本章は NDE でなされた「言語の死亡宣告」(戸田山 2002) について考察する。NDE は哲学者や言語学者が想定する規約 (convention) に基づいた言語観を大胆に否定するが、NDE が論じるコミュニケーションは日常言語の実態を鋭く描いており、その英語教育論的含意を探ることには一定の意義がある。また現行の英語教育の評価モデルは百花繚乱状態であり、それが測定する能力も多岐に亘っている。しかしながら先に指摘した内容と重なるが、不思議なことに、各評価間には一定の相関が見られ、いくつかの根本的な問題を孕んでいるにも関わらず、概ね

学習者に受け入れられている傾向がある⁵⁾。日常なされるコミュニケーションの実態とはいかなるもので、英語教育はこれまで学習者の何を（意図する、しないにせよ）評価してきたのか。既存の評価パラダイムが扱い切れていなかった評価のスコープとはいかなるもので、実感を持つ評価とはどうあるべきか。もちろん NDE がこれらに直接回答しているわけではないが、示唆に富んだ含意を多く持つ。以降では NDE を大学英語教育の文脈で読み替え、英語力の（客観的）存在、そして評価可能性について否定的な見解を述べる。そして理論的な見地から、既存の評価パラダイムの問題と限界を追求する。

2.1 NDE による言語の非存在説

Davidson は NDE において、言語とコミュニケーションの言語の関係を言語哲学の観点から考察し、下記に抜粋した独自の結論を導いた。戸田山が「言語の死亡宣告」と見做す根拠も以下の諸言及によるものだと思われる。

... we have erased the boundary between knowing a language and knowing our way around in the world generally. ... (p.265, ll.3-4)

... There is no more chance of regularizing, or teaching, this process than there is of regularizing or teaching the process of creating new theories to cope with new data in any field. ... (p.265, ll.10-12)

... I conclude that there is no such thing as a language, nor if a language is anything like what many philosophers and linguists have supposed. ... (p.265, ll.22-24)

Davidson は NDE で規約に基づいた言語観を根本的に否定し、「われわれは個々の発話において他者と向き合い、経験の積み重ねによって身につけたスキルのもとで、その都度の解釈に賭けていく。友愛と寛容において、相手の発話と向かい合い、それをその都度理解可能なものにしていくという仕方においてしか、我々は他者と言語的に出会うことができない」（森本 2004）と述べるに至る。なお「言語は教えられない」という主張は、言語教育を研究する応用言語学、そして第二言語習得論研究者並びに教育者にとって、見過ごすことのできないラディカルなものである。少なくとも言語教育を標榜する限りにおいて、関係者は正当な「反論」ができなければならないだろう。

本論文は NDE そのものを論評するものではないため、NDE で用いられた理論装置の全てを検証するわけにはいかない。しかしながら、Davidson が論じるコミュニケーションの実態が、日常の私達の言語を使ったやり取りを言い得ていることも確かであり、種々の論拠には一定の説得力がある。NDE は言語コミュニケーションにおける根本的な問題を提起しており、言語の非存在説に与するにせよしないにせよ、このような「難問」を考えることは研究の理論パラダイムを今一度確認し、再考する上で有意義であろう。

Davidson がなぜこのような認識に至ったのか、それは NDE で展開される、コミュニケーション

ン成立の局所性にある。発話の受け手 (= 解釈者) は、時として発話者の字義の意味と、発話者の「真の意味 (NDE ではこれを「第一の意味 (first meaning)」と呼ぶ)」が一致しない場合、必要とあらば字義の意味を改竄してまでも第一の意味を「正しく」解釈しようとする⁶⁾。さらに言い間違いは単純にパターン化できない。例えば発話者 A は「arrangement を derangement と言い間違える、受動文と能動文を取り違える傾向にある」といった一定のパターンがあると解釈者 B が見做し、そのパターンが再帰的に適用できるかといえばそうではないのである。もちろん Quine (1960) が指摘するように、一定の発話の保守傾向は見られるかもしれない。しかしコミュニケーションを取り巻く状況は、発話者個人内においてでさえ、常に動的に作り変えられ、意味とはその場その時において「当座 (暫定) 的」に成立するのみであることを NDE は論証するのである。

NDE で Davidson は、現実世界の言語コミュニケーションが「当座理論 (passing theory)」によって遂行され、ある発話に対して、解釈者がその都度暫定的に意味を解釈させることで成立することを論じた。無論、我々にはコミュニケーション以前に保持していた体系的かつ再帰的な知識の集積である「事前理論 (prior theory)」があり、これらの知識も総動員してその都度の状況から発話者の第一の意味を読み解く。したがって事前理論としての言語知識は決して無駄ではない。これは言語能力の高低がコミュニケーションの理解に影響することを説明し、常識的に考えても納得いくことである。すなわち、豊かな事前理論と高いコミュニケーション能力の評価には一定の相関があると考えerことは妥当である。しかし NDE は、事前理論が現実のコミュニケーションに果たす役割は限られており、当座理論を発話者と解釈者がその都度共有することこそが、我々の理解のメカニズムであることを言い切るのである。

2.2 言語の非存在説が導く評価の「無力化」

「言語コミュニケーションを成功させるために共有されるべきは当座理論である (What must be shared for communication to succeed is the passing theory. NDE p.261, ll.14-15)」とは何を意味し、含意するのか。NDE が説く当座理論には、共有した文法も無ければ規則も無く、学習可能な共通の核といったものも無い。任意の発話はその時々で意味を変え、その意味でまさに「任意」なのである。これは一見、我々を途方も無い大海原に突き出すような宣告にも思え、言語教育そのものを根本的に無益なものにせしめる。NDE が我々に突きつけているのは何なのか。

繰り返すが、NDE はいわゆる「言語知識」を否定してはいない。ただ「多くの哲学者や言語学者が考える意味」での「言語」は存在しないと述べるのであり、要点はこれに尽きると思われる。多くの哲学者や言語学者が考える意味での言語とは「学習/習得可能で、意味や解釈が再帰的で固定化されており、慣習や規則に支配された体系的なもの」とその特徴を列挙しておいて差し支えないだろう。これらを共有しているからこそ「通じ合える」のであり、それらをどれだけ極められるかが、言語コミュニケーションにおいて「能力のある (competent)」と見做される評価軸となるのである。それは謂わば「常識的な」言語観であるとさえいえよう。

NDE はこれら全ての想定を否定する。言語を使ったコミュニケーションにおいて、解釈者は意図を上手く汲み取る能力が必要であり、発話者は意図を上手く伝える能力を要する。これを Haber のように「戦略 (strategy)」と呼ぶかどうかは別として、互いが持つ当座理論を最大限

収斂させ、その都度のコミュニケーションの成立に繋げる能力こそが最も「物を言う」のである。ここで言語能力はコミュニケーション成立における手掛かり程度にはなっても、理解における主要な任務からは外されている。NDEは我々が言語能力に対し過剰な役割期待を課していた可能性を指摘し、「(過重な)肩の荷を下ろさせる」ことを提案しているのである。言語能力は、一般に我々が想定するほど万能／普遍なものではなく、その都度役に立ったり立たなかったりする、脆く壊れやすい性質を持つ(のかもしれない)。NDEは我々がコミュニケーションの成立における「もっと重要な要素」に目を向けることを強く促す。

NDEによる言語の非存在説をどの程度深刻に受け止めるかについては諸説あるだろう。しかし仮にDavidsonの指摘を真に受けた場合、例えば以下の場面における素朴な疑問に容易に回答がつく。

- (1) 筆者が2013年2月より4週間引率をした生命科学部、薬学部、スポーツ健康科学部独自の海外留学プログラム「カリフォルニア大学デービス校におけるEnglish for Science & Technologyプログラム」において、TOEIC等の英語能力を示す指標が極端に低い学生であっても、見事に現地学生やコミュニティーに打ち解け、事実、十分にコミュニケーションができていた(また短期間でTOEICの点数も上昇した)⁷⁾。
- (2) TOEICには、リスニングとリーディング能力を測定・評価する通常のTOEIC(LR)と、スピーキング・ライティング能力を評価するTOEIC-SWがあり、生命科学部と薬学部では、希望者全員にTOEIC-SWを、1～2回生には必修でTOEIC(LR)を受験させている。後者は前者に比べ、より「発信能力」を評価すると思われるが、これらのスコアが想定する相関⁸⁾から著しく外れる学生が存在する。すなわち、TOEIC(LR)がかなり低い学生であっても、TOEIC-SWではとりわけWritingで高得点をあげる学生が散見された。
- (3) 「プロジェクト発信型英語プログラム」における「プロジェクト」の授業では、各学生の興味・関心に基づくリサーチ・プレゼンテーションが展開されているが、プロジェクトの評価は必ずしも学生の英語能力と相関しない。これは英語能力というよりも、プロジェクトの内容の評価が全面に出てくるためでもあると思われるが、言語メディアが発信内容の「アクセント的機能⁹⁾」しか果たさず、マルチモーダル・マルチメディアによるコミュニケーション活動が行われた場合、言語メディアがプロジェクトにおいて果たす役割は限定的である。また興味深いことに、プロジェクトにおける英語使用を観察すると、取り扱う内容、すなわち扱うトピックによって学習者の英語能力自体も大きく異なることが分かる。彼らが興味・関心を持つ内容であれば、それに関する語彙や背景知識、固有名詞や映像、なされる非言語行為等に精通するため、他のトピックではほとんど言語的なやり取りができない学生でも、内容の大半を理解し、実際の質疑応答も立派にこなす。もちろんこれには「何とかして伝えたい、答えたい」というコミュニケーションに対するモチベーションも考慮に入れる必要があるだろう。

紙面の関係上、上記それぞれの事例にこれ以上立ち入ることは控えるが、これらに共通していることは、事前理論だけでは実際のコミュニケーション成立の度合いを正確に予測できない

ということである。つまり我々は、その都度ローカライズされたコミュニケーションを一つ一つ観察し、そこにおける当座理論の共有のされ方を評価し、コミュニケーションの成立を評価するしかないのである。時には言語知識の多少が当座理論の共有度合いに寄与する、すなわち、言語知識の多少がコミュニケーション成立の度合いを正確に予測することもあるだろう。しかしそれも「たまたま」なのであり、「規則」として定式化した途端、破綻することになるだろう。

このように考えるならば、言語能力とは通常我々が想定する以上に、一般的な通用性が低く、謂わば「心許ない」ものであることが認められるのであり、仮にそうであるならば、それによってなされる評価活動にも同じ指摘ができるのではないだろうか。言語教育において、我々は無意識に、一度つけられた評価が少なくとも一定期間通用するものであると思い、またその評価がある程度の一般化に耐えられると見込んでいる。しかしそのような評価はそもそも存在するのであるか。一般に言語教育は、コミュニケーションにおける言語メディアの役割を支配的に捉える傾向があり、「言語至上主義 (linguistic supremacy)」として批判されてきた歴史がある (山中ほか 2007)。抛って立つべき「言語」そのものに対して非存在説が投げかけられる中、言語に依存した評価活動も同様に「危うい」ものであることを本論文は指摘したい。即ち、既存の評価活動は無効である可能性がある。以降、本論文では既存の評価論パラダイムに基づいた評価活動を一旦無力化し、枠組みそのものを再検討、再構築することを提案したい。

3 評価論パラダイムの再構築：「評価論の肩の荷を下ろす」

英語教育における評価論の重要性はどれだけ強調してもし過ぎるものではない。そして、英語能力、または英語コミュニケーション能力をいかにして評価するのか、これは現代の英語教育が直面し、そしてこれからも直面していかなければならない難題である。大学英語教育に限らず、昨今社会の至るところで何を、どう評価するかについて関心が高まり、その重要性が指摘されている。しかし先にも指摘した通り、昨今の英語教育はそこに求められるべき「質」が大きく変化する中で、評価に関する明確な指針が定まっているわけではない。特に大学英語教育の分野においては、熟達度テストに代表される測定テストへの批判と相まって、評価の問題は一層難しい問題となりつつある。また、いわゆる英語4技能の中の「聞く (listening)」、「読む (reading)」という受信型スキルのテストに比して、「話す (speaking)」、「書く (writing)」という発信能力の評価については、未だ開発・研究の余地が大きいことは先に指摘した通りである。

昨今、特に大学英語教育の分野では、(英語) 評価モデルの乱立という問題がある。背景としては、グローバル化の進展に伴う英語のメガ言語化 (鈴木 2012: 26-28) の影響により、必要悪として英語の重要性が否が応にも高まり、ビジネスや留学において、一定程度の英語力の担保を証明することが必至となったことは無視できない。また「そもそも何を評価すべきか」を考えさせる発端となった communicative competence (Hymes 1972) を巡る種々の要因が重なったためだと思われるが、国内外を問わず、日々新たな評価モデルが開発、実用化され、その数は増える一方である。しかしながら誰もが認める通り、各モデルには長所、短所があり、未だ普遍的、絶対的に通用するような万能モデルは存在していない。例えば TOEFL, TOEIC, 英検等、

英語教育評価のテスト・モデルとして一定の知名度を持ち、現に相当数の人々に利用されているものがあるが、これらの評価モデルでさえ、やはり一長一短であることには変わらない。

仮に前章の議論で、言語の存在そのものが不確かになったと結論づけるならば、その言語を評価することに果たしてどこまで意味があるのだろうか。前章では言語に課せられた過度な肩の荷を下ろすことを論じたが、このことは同様に評価論に関しても述べることができる。我々は無意識のうちに評価に万能性を求め、その結果評価を身近なものではなくし、それが持つフィードバック機能を十分役立てられていない可能性がある。本章では、評価論パラダイムに暗黙裏に想定されている「一般化機能」、「未来予測機能」の2点に着目し、これらの「誤解」ともいえる認識を論じることで、現行の評価論に課せられている肩の荷を下ろし、学習者にとって評価を至近的で親しめるものに変えることを模索する。

3.1 評価の抽象性（一般化機能）の否定

金谷ほか（2003: 40-41）は、評価が「行動（performance）」に対する評価と「特性（trait）」に対する評価の2種類があるとし、その観点や尺度が異なることを指摘している。行動の評価とは、学習者の個々の行動そのものを評価し、行動時の偶発的要素（生理的／情意的状態による内的要因や、物理的環境等による外的要因）によって能力を存分に発揮できない（あるいは通常以上に発揮できる）可能性を前提とするものである。一方特性の評価とは、学習者の適正、知識、能力、性格等、ある時点で学習者に備わっている比較的安定した性質を評価するものであるとしている。

一般の多くの言語能力評価（テスト）は、学習者の特性を評価することを目的としていることは明らかであり、そのために例えば比較的多くの問題を解かせることで、内容や文脈による偏りが生じないように工夫が施されている。その一方で、プロジェクト発信型英語プログラムに限らず、大学英語教育の現場で学習者が行うプレゼンテーションやディスカッション、プロジェクトは個別具体的な行動であり、その評価は必ずしも特性を見るものではないことに注意しなければならない。行動の評価と特性の評価は、様々に異なった視座を持つものであるが、重要な論点として、「内容（content）」をどう扱うかということに関して、両者は立場を決定的に異にする。すなわち特性を評価するために比較的安定した性質を見極めるためには、評価が内容に依存することは好ましくないのである。したがって、例えばスピーチ（コンテスト）の優劣を判断することにおいて、特性を評価するために内容を評価基準から除外する立場を採ることもある¹⁰⁾。本論文は、ここに我々が評価に対し暗黙裏に想定する「評価の一般化機能」と、それによる弊害が生じる原因があると考えるのである¹¹⁾。NDEは次のように指摘する。

…What is essential is a basic framework of categories and rules, a sense of the way English (or any) grammars may be constructed, plus a skeleton list of interpreted words for fitting into the basic framework. If I put all this vaguely, it is only because I want to consider **a large number of actual or possible proposals in one fell swoop**; for I think **they all fail to resolve our problem**. … none of them satisfies the demand for a description of an ability that speaker and interpreter share and that is adequate to interpretation. … (p.263, ll. 1-8, 強調は筆者)

無論、全ての解釈理論を包含する「十把一絡げ (in one fell swoop)」の理論や規則、フレームワークがあればそれに越したことはない¹²⁾。しかし Davidson はその試みは悉く失敗すると論証するのである。たとえ今この時点でそうした完璧な一般化に耐えられるフレームワークを作り上げられたとしても、Davidson の言葉を借りれば、once is enough to summon up a passing theory assigning a new role to 'epitaph'. (NDE p.262, ll.5-6) ということになる。すなわち新たな「言い間違い (にも関わらずコミュニケーションが成り立つ事例) 一つ」によって、理論は振り出しに戻ってしまうのである。

先に述べたように、大部分の既存の英語教育評価モデルは、個々人の「一般化された」英語能力である「特性」の抽出に主眼があるため、あらゆる英語能力の表出を平均し、予測した評価を出さざるを得ない。しかしこのような方法で抽象化された評価は、2.2の事例群で示した通り、その都度の学習者のパフォーマンスを正確に予測せず、こうした例は枚挙に遑がない。仮にある評価によって個々の学習者の特性が算出できたとしたら、それは個々のパフォーマンスの全てを「超越した」評価が行えることを意味する。言うまでもないが、人々が日常織りなす種々のコミュニケーションには文脈があり、状況がある。関わる人も異なれば、被評価者自身も変化し、短期間に英語能力を伸長させる場合もある。果たしてそれら全てをメタの次元で把握し、一段高いところから「十把一絡げ」に評価などできるであろうか。抽象化への憧れとさえいえるかもしれないが、西欧の近代合理主義は、物事を抽象化して普遍的に捉えることを追求し、そうすることがあたかも具体的事例への眼差しを優越するかの如く見做してきた。しかしながら20世紀、そうした西欧近代の知のあり方に、根本的な異議申し立てが突きつけられ、現在このような態度は学問や研究のあり方も含め見直されつつある。確かに西欧近代の合理主義が染み付いた現代社会に生きる我々にとって、一般化され、抽象的に捉えられることに対し、あたかも「安心感」のようなものを感じることができ、逆に個別的、具体的にしか通用しないものに対しては「心許なく」感じてしまう。Quine (1960) が繰り返し引用する「ノイラートの船¹³⁾」のメタファーが説明する通り、今や我々は大海原に投げ出され、抱いて立つところを失った船乗りのようである。しかし残念ながら、個々の事例を超越した抽象化や一般化は、ことに言語評価に限っては、虚しい幻想でしかない可能性を我々は認識すべきなのである。

3.2 評価の通事性 (未来予測機能) の否定

本項における「通事性」とは時間軸における共通性を意味することとし、Sassure (1993) の「通時態 (diachrony)」から着想を得た。やや強引な纏め方をすれば、前項で論じた評価の抽象性／一般化機能の否定は評価の「共時態 (synchrony)」における共通性 (「共時性」) を否定したものであり、それは同じ時間軸で理論上共起し得る、異なった文脈や状況における評価の一般化の否定である。本項では視点を変え、評価の通事性についてその限界を指摘したい。特に本論文は、評価における現在と未来との繋がりについて、これを「未来予測機能」と称し否定的に捉えることとする。なお以降で論じる評価の未来予測機能であるが、多くの論点を含むため本論文では十分に立ち入った議論をすることができない。論点と研究の方向性を提示する程度に留まらざるを得ないことを先に断っておく¹⁴⁾。

我々は言語能力評価に対して、通事性の存在を暗黙裏に思い込んでいる傾向がある。実際

TOEFLはスコアが2年間有効であることを公式に認めており、TOEICもこれに準じている。また英検の場合（ケンブリッジ英検も含む）、取得した資格は「半永久的」であるとしている。これらは、ある時点でなされた評価が一定期間の通用性／普遍性を持つことを保証することを意味し、評価の通事性が前提とされていることの一証左といえよう。謂わば時間という変数に関わり無く評価が通用するということであるが、果たしてこの考えは妥当だろうか。

NDEは当座理論を用いることで、コミュニケーションが局所的に成立することを強調し、その際の理論は再帰的でなく、むしろ暫定的で刹那的であることを論じた。NDEが...there would be a new language for every unexpected turn in the conversation, and languages could not be learned and no one would want to master most of them. (NDE p.264, ll.25-27)と言及するように、これから起こるコミュニケーションに使われる（理解／発信）能力は、もはや過去のそれではない。新たなコミュニケーションを暫定的に成立させる新たな理論がその都度必要なのである。評価が時間軸を跨いで通用するということは、文脈や状況を跨いで通用することと同じく極めて危うい想定であり、評価は我々が思う以上に限定的にしか通用しないかもしれないのである。

過去の評価に囚われ続けること、別の表現をするならば「点数の一人歩き」を放置することは、学習者にとって必ずしも良い影響をもたらさない。すなわち評価の未来予想機能には弊害がある。国際的に見ても自己肯定感が低い日本の若者¹⁵⁾にとって、過去の評価は自身の「できないこと」が未来永劫続くことを彼らに予感させ、現在進行形で成長し、その都度現前のコミュニケーションを曲がりなりにも成立させている実態を見えにくくさせてしまう。ある英語能力評価が「過去のある時点の／一回限りの／その時点での評価」であり、「それ以外（以降）の評価とは一切関係ない」と学習者が心底から思えるならば、彼らは随分と気持ちを楽しめることができるはずである。過去が未来を「縛り続ける」ものではないと認識できることは、未来のコミュニケーションに希望を持つことに繋がる。結果「いま、ここ」の行為に集中できるようになり、モチベーションの好循環が生まれる素地ができる。評価はもはや学習者にとって「嫌なもの／恐れるもの」ではなく、未来をより良くするための情報を提供する有力なtipsとなり得る。これこそ評価が本来果たすべきフィードバック機能であり、評価とは、学習者に身近で役に立ち、肯定的な意味合いを持つべきなのである。学習者にとって最大の関心事は、眼前の「いま、ここ」にある当座のコミュニケーションの成立である。「過去」の残像に拘泥し、それによって「未来」を予測することは、むしろ個々人の「現在」の能力を傾注する妨げになる可能性がある。今後の論点としてここに記しておく。

以上の考察を踏まえ、次章では「希望の評価論」を実現すべく、新たな評価論パラダイムのあり方とその論拠を模索してみたい。

4 「評価論プラグマティズム」の素描

本論文はNDEをコミュニケーションを重視する大学英語教育の文脈で読み直し、言語能力の存在、そして評価可能性について否定的スタンスを見出した。すなわち既存の評価パラダイムに限界があることを述べ、その根拠について具体的に指摘した。しかし、仮に汎用化に耐え得る評価可能性を否定したとしても、それにも関わらず評価活動を行う必要が教育現場にはある

だろう。こうした前提で評価を行う場合、暫定的に「説得力」という表現を用いるが、説得力のある評価とはいかなるものであるべきだろうか。本研究では新たな評価パラダイムについて検討し、提案する。理論的立脚点はプラグマティズムである。以降で英語教育における「評価論プラグマティズム」について議論し、その方法論について具体的な輪郭を描くこととしたい。

4.1 プラグマティズムの問題意識

プラグマティズムとは、かつて Peirce ([1878] 1992: 132) によってその原型が示されたものであり、また James (1907) によって一つの方法論として定義されたものである。20 世紀のアメリカ哲学の根幹をなすようになったプラグマティズムは、後に Rorty によってラディカルな進化形、「ネオ・プラグマティズム」として発展することになるが、ここには従来の科学方法論に対する徹底した決別の態度が見て取れる。

プラグマティズムとは、アメリカの歴史・文化を貫く一つの世界系であり、哲学である。これは無論簡単に論じられる類のものではなく、またそれは本論文の意図するところではない。Pierce の定義に始まり、James の問題解決への着目、そして Dewey の具体的な教育への応用に至るまで、これらに一貫するのは、プラグマティズムの徹底した現実や実践への着目である。Dewey や、後に Rorty も指摘するように、西洋哲学が現実や実践を軽視するのは、何も客観科学が隆盛を誇った近代以降の話ではない。古代ギリシア哲学以来、二元論的な世界観は、肉体に対する精神の優越、あるいはその特権性を暗黙のうちに是としてきた歴史を形成した。こうした価値観に異議申し立てを行うのが思想としてのプラグマティズムであり、実践家としてのプラグマティスト達である。なぜプラグマティズムが現実世界や実践にその意義を認めようとするか、その理由は現実社会に「役に立つ」ためには、実践に活かされることこそ最も意味があると考えるからに他ならない。

Dewey にせよ、James にせよ、彼らの問題意識の根底には科学が持つ認識論的な狭さがある。我々の日常世界では、仮にある信念に確信が持てなくても、Peirce がいうアブダクションによる推論で積極的に仮説を構築し、試行錯誤しながら自らの知を拡大している。現実世界によりよく対処するためには、こうした模索的な実践を継続しようとするその態度こそが何よりも重要であり、正否の裁定を待つことではない。絶対的なもの、科学的なものによる一見動かしがたく思える真理はむしろ私たちの自由な考えや行動を妨げ、窮屈にさせてしまう。しかし私たちの認識や行動は、科学の枠を超え出るのである (James 1956: 509)。

4.2 プラグマティックな評価のあり方

前項で論じたプラグマティズムを、英語教育評価論の基盤に据えるならば、いかなる具体的提案ができるだろうか。以下荒削りではあるが、要点を纏めたい。

その都度なされる評価は、当人の能力を一般化もしなければ、次なるパフォーマンスを予測するものでもない。それはただ過去の記録として、その時「できたこと (具体的な can-do)」を思い出させてくれるものに過ぎない。しかし同時にこれは、過去の自分の姿を思い起こすものであり、己の現時点での立ち位置を示すものになる。これは学習者の自信に繋がり、未来へのささやかな希望として機能するだろう。

いかなる評価法も、何とかして学習者の英語コミュニケーション能力を評価しようとしているはずである。目的そのものは妥当であるから、その適用範囲の拡大に躍起になる、すなわち普遍性／妥当性／通用性を担保しようとせず、その都度の一過性の評価としてのみ考えるようにすれば良い。皮肉にも、こうして考えてみれば、そもそものオリエンテーションが等しいのであるから、先に指摘した評価モデル間に一定の相関が見られることはある意味で当然なのかもしれない。もちろんこの相関も、実証する必要もなければ、換算式を編み出す必要もない。しかしこれが意味するのは、いかなるテストでも一定の役に立っている（「機能している（Rorty 1979）」）のであり、それで十分と考えれば良いのではないだろうか。

またいかなる評価に関連する行為も、漠然と一般の人を対象に行っては意味がない。誰にとっても有益でなく、役に立たないからである。したがって学習者（被評価者）は、自分が取り組みたい／評価されたい内容について専門家や特定の利害関係者に向かってパフォーマンスを披露し、その人々に直接評価してもらうことが最適だと本論文は考える。この評価は「説得力を持ちさえすれば」、平準化される必要もなければ形式にも拘る必要もなく、ただそれを記録し、参照できるようにさえしておけば良い¹⁶⁾。インターネットとは、まさにこうした評価活動を容易に実現させるメディアであるはずである。学習者は受動的に評価されるのを待つのでは無く、自ら積極的に動いて評価してもらいたい人を探し、そして実際に評価してもらう。それが彼らにとっても最も納得がいく、プラグマティックな評価となるだろう。

5 おわりに：英語教育評価論の未来

評価の問題は難しい。しかしながら学習者が創り出すパフォーマンスについて、適切な評価の考え方と実質を伴ったモデルが提示できなければ、英語教授法そのものに対する説得力も欠けることになる。本論文は、ある意味でこうした前提を打ち崩すが如く、標準化された適切な言語評価モデルなどそもそも存在し得ないことを言及した。そして、正確かどうかは二の次で、現実世界に直結し、特定の目的に具体的に役に立つ評価こそが妥当性を持ち得ることを提起した。

具体的で役に立つためには、特定のニーズなり方法論なりがその都度必要となり、必然的に普くケースに当て嵌まるオールマイティの評価活動は不可能となる。したがって世界中で様々な個別具体的な評価実践が行われることになるだろう。これは、一見すると評価活動が蜻蛉化し、効率が悪いように見えるかもしれない。しかしながら、そうすることで個々の実践に有用となり、学習者にとって評価が実態に即したものと感じられるようになるだろう。そしていつの日か蜻蛉的な評価を横断する指標が生み出され、再度評価の一般化が試みられるかもしれない。この点に関してはこれからの研究を待つしかない。

本論文が一貫して主張したことは、評価論パラダイムを今一度検討し、評価論を大胆、柔軟に変化させる可能性を常に開いておくことである。少なくともこれまでの評価論／評価モデル／評価実践のいずれも、絶対視することは控え相対的に捉えるべきである。評価の相対化とは、極論すれば評価の「無力化」である。たとえ通用性の高い評価論モデルが存在したとしても、それは知名度がある、採用されている数が多い」等の理由からある種の実用性を醸し出してい

るからであり、その評価の信頼性とはイコールでないことに注意しなければいけない。

このように考えると、本論文の及ぶ範囲はもはや大学英語教育に留まるものではないことがわかるだろう。英語教育全般、言語政策、そして教育論にも同じ枠組みを当てはめることができるはずである。そうなれば、言語を知ることと、この世の中で押し並べてうまくやっていくこととの境界線を消し去ったNDEの議論は愈々現実味を帯びてくる。Davidsonは言語哲学の観点から言語とコミュニケーションを論じたに過ぎず、彼自身が英語教育や評価の問題を直接扱うことはなかった。しかし、NDEの論点を評価論の文脈に当て嵌め、その解釈を拡大するならば、言語活動にはそれぞれの人間の人格、行動、感情、意識、文化が重層的に結集し、それらを一つでも切り離して評価することは不可能であることが読み取れる。言語活動は人間の活動そのものであり、しかもその都度移り行くので固定しない。はじめから捉えどころがないのであるから、評価できると思うこと自体が人間の欺瞞なのかもしれない。仮に全人格的な評価を目指すのであれば、評価への絶対的信頼を捨て去った上で、ダイナミックに、これまで評価されなかった要素、「測定できない」という理由で排除されてきた概念を野心的に組み込むことで、学習者のモチベーションに好影響を与えられるかもしれない。また評価における権力構造を徹底的に排し、皆がフラットに参加して発信し、常に創り替えられ続ける評価のあり方も検討されるべきである。

既存の評価論パラダイムは、我々が想像するほど盤石ではない。しかし、繰り返しになるが、これは既存の評価モデルを全否定することではない。否定するとしたら、評価に対して我々が暗に思い描くその「無謬性 (infallibility)」にあることを最後に指摘しておきたい。

注

- 1) 略称IRT (Item Response Theory; Item Latent Theory)。項目反応理論とも称される。
- 2) 鈴木 (2003: 100)
- 3) 山中 (2008) など
- 4) こうした中、評価のオーセンティシティ (authenticity) を重視する昨今の取り組みは無視できない。日本国内に限っても、初等中等教育を皮切りに、ポートフォリオや観点別学習状況の評価等、従来とは異なる形成的評価の研究と実践が進展している。また多くの高等学校、大学等においては学習到達目標をローカルに設定し評価するためのCan-doリストの作成が進んでおり、これらが評価の妥当性を新たな側面から強力に高めていることは間違いない。しかしながら、たとえこうした取り組みによってオーセンティックな評価に近づくとしても、それは程度の問題でしかないとの認識を本論文は持つ。この点において以下のBachman (1990) の議論は示唆に富む。Bachmanは実生活 (Real-life) における言語評価のオーセンティシティについて問題点を検討しており (1990: 303-305)、Clark (1978b: 23) やJones (1985: 18) を引用しながら、real-life法の難しさを述べている。個人の言語熟達度を評価する最善の方法は、「直接評価」であり、それは個人を (長期間に亘り) こっそりと尾行/観察することである。しかしこれは現実的には極めて実現困難で、不可能ともいえるからである。
- 5) 「プロジェクト発信型英語プログラム」における「プロジェクト」の授業群では、学習者は自身の興味・関心に基づいたプロジェクトを立ち上げ、遂行する。リサーチ、プレゼンテーションを英語使って実施し評価を受けるが、2008年度のプログラム開始以降、授業で受けた評価に対して疑義、照会を求める立命館大学の「成績確認制度」を利用して問い合わせをした学生はほぼ皆無に近い。
- 6) 日常世界では、こうした「改竄」はコミュニケーション成立のためには必要不可欠なことであり、だ

からこそ我々は言い間違いを認識できる。NDEはこうした現象をむしろ「当たり前」に生じること（ubiquitous）」だと主張する。

- 7) Yamanaka (in press)
- 8) http://www.toeic.or.jp/library/toeic_data/sw/pdf/score_comparison_list.pdf
- 9) 鈴木 (2003: 50)
- 10) 金谷ほか (2003: 41)
- 11) 紙面の都合上これ以上立ち入った議論はできないが、「内容」を除外することは、例えばハロー効果やピグマリオン効果等、評価者が教育現場で突きつけられる数多の実感を「無かったものとする」ことを意味する。
- 12) Davidson は、一般化が有効ではないと主張するにあたり、一般化理論の一つ一つにどのような問題があるかを明示的に詳述するのではなく、あえて自らが（批判の対象である）一般化の身振りを取ることによって、いかにそれが不十分で「曖昧」でしかあり得ないかを、パフォーマンスに読者に体得させる方略を取っている（つまり“in one fell swoop”は直接的には Davidson 自身の身振りに言及しているが、その身振りは実は批判対象の模倣である）。
- 13) We are like sailors who have to rebuild their ship on the open sea, without ever being able to dismount it in dry-dock and reconstruct it from the best components. In Neurath, O. *Anti-Spengler*, 1921.
- 14) 以降の議論において、評価の一般化や抽象化に対する問題意識は前項と共有するものであり、これらの論考については省略する。
- 15) 内閣府「特集 今を生きる若者の意識～国際比較からみえてくるもの」『平成 26 年版子ども・若者白書』などを参照。
- 16) 無論この提案は大胆かつ物議を醸すものであることは十分に予測できることである。ただしこの点の論拠までを本論文が議論することは不可能であり、紙面を改めて論じたい。

参考文献

- 金谷憲編著『英語教育評価論：英語教育における評価行動を科学する』河源社，2003年。
- 鈴木佑治ほか『発信する大学英語：Activating College English』郁文堂，1994年。
- 鈴木佑治ほか『コミュニケーションとしての英語教育論：英語教育パラダイム革命を目指して』アルク，1997年。
- 鈴木佑治『言語とコミュニケーションの諸相：理論的考察から言語教育まで』創英社／三省堂書店，2000年。
- 鈴木佑治『英語教育のグランド・デザイン：慶應義塾大学 SFC の実践と展望』慶應義塾大学出版会，2003年。
- 鈴木佑治『グローバル社会を生きるための英語授業：立命館大学 生命科学部・薬学部・生命科学研究所プロジェクト発信型英語プログラム Project-based English Program』創英社／三省堂書店，2012年。
- 戸田山和久「真理条件的意味論と検証条件的意味論」『言語哲学を学ぶ人のために』野本和幸ほか編，世界思想社，2002年
- 森本浩一『デイヴィッドソン：「言語」なんて存在するのだろうか』NHK出版，2004年。
- 山中 司「コミュニケーションを重視した大学英語教育における新たな評価モデルの構築：「説得・主張のための発信型コミュニケーション評価モデル」の提示を通して」『スピーチ・コミュニケーション教育』Volume 21, 日本コミュニケーション学会，2008年，pp.113-134。
- 山中 司ほか「コミュニケーション重視の言語教育における言語の役割とは：「言語の限界」に対する理論的考察」『KEIO SFC JOURNAL』Vol.6, No.1, 2007年，168-185頁。
- Bachman, L.F. *Fundermental Considerations in Languauge Testing*, Oxford: Oxford University Press, 1990.
- Clark, J.L.D. 1978b, “Interview Testing Research at Educational Tesing Service.” in Clark 1978a: 211-28.
- (Clark, J.L.D. (ed.) *Direct Testing of Speaking Proficiency: Theory and Application*, Princeton, NJ:

- Educational Testing Service, 1978a.
- Davidson, D. *Inquiries into Truth and Interpretation*, Oxford University Press, 1984.
- Davidson, D. "A Nice Derangement of Epitaphs.", in *The Essential Davidson*, edited by Ernie Lepore and Kirk Ludwig, New York: Oxford University Press, 1986, 2006, pp.251-265. (柏端達也ほか訳「墓碑銘のすてきな乱れ」『真理・言語・歴史』春秋社, 2010年, p.p.142-174。)
- De Saussure, F. *Saussure's Third Course of Lectures on General Linguistics (1910-1911) From the notebooks of Emile Constantin*, French text edited by Eisuke Komatsu, English translation by Roy Harris, Pergamon Press, 1993.
- Hymes, D. "On Communicative Competence" in J. Pride & J. Holmes eds. *Sociolinguistics: Selected Readings*, Penguin, 1972, pp.269-293.
- James, W. *Pragmatism: A New Name for Some Old Ways of Thinking*, New York: Longman Green and Co, 1907.
- Jones, R.L. "Some Basic Considerations in Testing Oral Proficiency." in Lee *et al.* 1985, pp.77-84. (Lee, Y.P., A.C.Y. Fok, R. Lord, and G. Low. (eds.) 1985. *New Directions in Language Testing*. Oxford: Pergamon Press, 1985.)
- Peirce, C.S. "How to Make Our Ideas Clear," 1878, in *The Essential Peirce: Selected Philosophical Writings*, Volume 1 (1867-1893). Ed. by Nathan Houser and Christian Kloesel, Bloomington: Indiana University Press, 1992.
- Quine, W.V. *Word and Object.* , The MIT Press, 1960.
- Rorty, R. *Philosophy and the Mirror of Nature*, Princeton University Press, 1979.